

アジア諸国と人権 (その十八)



研究センター所長
京都大学名誉教授

安藤 仁介

前回の最後に触れたイーラム・タミール運動には、いくつかの系列の組織がありましたが、そのなかで次第に勢力を伸ばしていったのが過激派のLTTE (タミール・イーラム解放の虎) です。この組織は一九七二年にプラバカランが作った「タミール・ニュー・タイガー」を母体として、一九七五年に設立されたものです。ところが、一九七〇年から七七年まで政権の座にあった「スリランカ自由党 (SLFP)」はすでに見たとおり、七年の新憲法のもとでスリランカを、シンハラ仏教徒の単一国家とする政策を採択しました。また、公務員の

採用・昇進に新たな言語政策を取り入れてタミール系に不利な人事を進めたほか、大学入試に手を加えてシンハラ、タミールそれぞれの言語の受験者の平均点・偏差値が等しくなるようにしたり、各州ごとの人口比に準じて入学者数を決めたりしました。そのため、スリランカ最大都市のコロンボ周辺や北部のジャフナ州のタミール系の若者は不当な差別を受けたと感じ、かれらが過激なタミール民族主義に走る結果となったのです。そのなかで一九八三年七月、LTTEはジャフナで国軍に奇襲攻撃を加え、一三人の兵士を殺害しました。この事件を契機としてシンハラ系住民の大規模な暴動が起こり、何千というタミール系住民が殺され、住宅や商店が焼き打ちに遭い、多数の女性がレイプの被害者となりました。こうして、いわゆる第一次イーラム戦争が起きたのです。

実は、スリランカの対岸インド亜大陸の南部には、スリランカ総人口の約三倍に当たる六千万のタミール系人の住むタミール・ナドゥ州があります。かれらは、スリランカのタミール系住民が迫害を受けている状況に無関

入ります。一九九〇年になるとインド平和維持軍は本国へ引き揚げ、そのあとスリランカ政府軍とLTTEは第二次イーラム戦争に突入することになりました。

心ではいられません。そうした事情もあって一九八七年七月、インドのラディヴ・ガンディー首相はこの問題に介入し、スリランカのジャヤワルダナ大統領とのあいだで和平協定に合意しました。この合意により、スリランカは憲法を改正して各州に州政府を置き分権制をとること、多数のタミール系住民が居る北部州と東部州については両州を暫定的に合併し分割の可否は住民投票で決めること、シンハラ語タミール語の双方を公用語とすること、反政府勢力の武装を解除させること、LTTEを抑え北東部を鎮静化するため一〇万のインド平和維持軍をスリランカへ派遣すること、などが取り決められました。

その後、一九九一年にラディヴ・ガンディー首相は暗殺されます。また二年後の九三年にはスリランカのプレマダーサ大統領が暗殺されます。さらに翌九四年、大統領の地位に着いたクマラトゥンガのもとで政府軍とLTTEは一旦停戦に合意しますが、やがて戦闘は再開され、これが第三次イーラム戦争と呼ばれることとなります。この過程を通じ、LTTEは反政府タミール勢力のなかでライバル・グループを弱体化したり抹消したりして、中心的な勢力となっていました。とくに問題となるのは、LTTEが穏健なタミール系指導者たちを殺害していったことです。こうして一九九七年には米政府がLTTEをテロ組織と認定しました。また翌九八年にはスリランカ政府自身がLTTEを非合法化するに至ったのです。

一面でこれらの取決めは、ホームランドを求めるタミール系の希望を満たし、反政府武装闘争を押さえ込むシンハラ系の希望に沿うものでした。しかし他面、シンハラ系にとってこの合意は押し付けられたものであり、LTTEは当事者扱いされなかったわけで、いずれの側にも不満が残りました。結局、スリランカ側は和平協定を誠実に履行せず、LTTEはインド平和維持軍と戦闘に